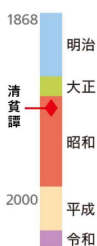


清貧譚

たん

太宰治

おさむ



以下に記すのは、かの聊齋志異の中の一編である。原文は、千八百三十四字、これ私たちの普通用いている四百字詰め原稿用紙に書き写しても、わずかに四枚半くらいの、ごく短い小片に過ぎないのであるが、読んでいるうちにさまざまの空想がわいて出て、優に三十枚前後の好短編を読了した時と同じくらいの満酌の感を覚えるのである。私は、この四枚半の小片にまつわる私のさまざまの空想を、そのまま書いてみたいのである。このようななしぐさが果たして創作の本道かどうか、それには議論もあることであるが、聊齋志異の中の物語は、文学の古典というよりは、故土の口碑に近いものだと思つていたので、その古い物語を骨子として、二十世紀の日本の作家が、不逞の空想を案配し、かねて自己の感懐を託しもって創作なりと読者に勧めても、あながち深い罪にはなるまいと考えられる。私の新体制も、ロマンチズムの発掘以外にはないようだ。

昔、江戸、向島^⑥辺りに馬山才之助^⑦という、つまらない名前の男が住んでいた。ひどく貧乏である。三十二歳、独身である。菊の花が好きであった。佳い菊の苗が、どこかにあると聞けば、どのような無理算段をしても、必ずこれを買求めた。千里^⑧をはばからず、と記されてあるから相当のものであることが分かる。初秋のころ、伊豆^⑨の沼津^⑩辺りに佳い苗があるというのを聞いて、たちまち旅装を調べ、顔色を変えて発足した。箱根の山を越え、沼津に至り、四方八方捜し回り、やつと一つ、二つのみごとな苗を手に入れることができ、そいつを宝物のように大事に油紙^⑪に包んで、にやりと笑って帰途についた。再び箱根の山を越え、小田原の町が眼下に展開して来たところに、ばかばかと背後に馬蹄^⑫の音が聞こえた。緩い足並みで、その馬蹄の音が、いつまでも自分と同じ間隔を保ったままで、それ以上近く迫るでもなし、また遠のきもせず、変わらさばかばかについて来る。才之助は、菊の良種を得たことで、有頂天なのだから、そんな馬の足音などは気にしない。けれども、小田原を過ぎ二里行き、三里行き、四里行っても、相変わらず同じ間隔で、ばかばかと馬蹄の音がついて来る。才之助も、初めて少し変だと気がついて、振り返って見ると、美しい少年が奇妙に瘦せた馬に乗り、自分から十間^⑬と離れていないところを歩いている。才之助の顔を見て、にっと笑ったようである。知らぬふりをしているのも悪いと思つて、才之助も、ちよつと立ち止まって笑い返した。少年は、近寄つて馬から下り、

「いいお天気ですね。」と言つた。

① 聊齋志異 中国、清代の怪異小説集。蒲松齡（一六四〇～一七一九）の著。

② 満酌の感 杯いっぱい酒をつがれたような満足感。

③ 故土の口碑 ふるさとの伝承。

④ 新体制 一九四〇（昭十五年）、第二次近衛内閣によって敷かれた、全体主義的国家体制。ここでは「私」は、この社会的激動に自らの創作態度を対置している。

⑤ ロマンチズム 感情や自由な空想を重視する文芸上の傾向。

⑥ 向島 今の東京都墨田区内、東京の東部を流れる隅田川東岸の地。

⑦ 千里 一里は約四キロメートル。

⑧ 伊豆 旧国名。静岡県の伊豆半島の一部。

⑨ 箱根の山 旧東海道の難所であつ箱根峠。

⑩ 油紙 桐油などを塗った防水用の紙。

⑬ 十間 一間は約一・八メートル。

「いいお天気です。」才之助も賛成した。

少年は馬を引いて、そろそろ歩き出した。才之助も、少年と肩を並べて歩いた。よく見ると少年は、武家の育ちでもないようであるが、それでも人品は、どこやら典雅で服装も小ざつぱりしている。物腰が、鷹揚おとうようである。

「江戸へ、おいでになりますか。」と、ひどくなれなれしい口調で問いかけてくるので、才之助もそれにつられて気をゆるし、

「はい、江戸へ帰ります。」

「江戸のおかたですね。どちらからのお帰りですか。」旅の話は、きまっている。それからそれと問い答え、ついに才之助は、今度の旅行の目的全部を語って聞かせた。少年は急に目を輝かせて、

「そうですか。菊がお好きとは、頼もしいことです。菊については、私にも、いささか心得があります。菊は苗のよし悪あしよりも、手当ての仕方ですよ。」と言って、自分の栽培の仕方を少し語った。才之助は、たちまち熱中して、

「そうですね。私は、やっぱり苗がよくなくちゃいけないと思っっているんですが。例えば、です、——と、かねて抱懐している該博なる菊の知識を披露し始めた。少年は、あらわに反対はしなかったが、でも、時々差し挟む簡単な疑問のつぶやきの底には、並々ならぬ深い経験が感取せられるので、才之助は、躍起になって言えば言うほど、自信を失

い、はては泣き声になり、

「もう、私は何も言いません。理論なんて、ばからしいですよ。実際、私の家の菊の苗を、お見せするよりほかはありません。」

「それは、そうです。」少年は落ち着いてうなずいた。才之助は、やり切れない思いである。何とかして、この少年に、自分の庭の菊を見せてやって、あつと言わせてやりたく、むずむず身もだえしていた。

「それじゃ、どうです。」才之助は、もはや思慮分別を失っていた。「これから、まっすぐに、江戸の私の家まで一緒にいらして下さいませんか。一目でいいから、私の菊を見てもらいたいものです。ぜひ、そうしていただきたい。」

少年は笑って、
「私たちは、そんなのきな身分ではありません。これから江戸へ出て、勤め口を捜さなければいけません。」

「そんなことは、なんでもない。」才之助は、すでに騎虎おきこの勢いである。「まず私の家へいらして、ゆっくり休んで、それからお捜しになったって遅くはない。とにかく私の家の菊を、一度御覧にならなくちゃいけません。」

「これは、大変なことになりました。」少年も、もはや笑わず、まじめな顔をして考え込んだ。しばらく黙って歩いてから、ふっと顔を挙げ、「実は、私たち沼津の者で、私の

⑩ 騎虎の勢い 止めるに止められない激しい勢い。

名前は、陶本三郎と申しますが、早くから父母を失い、姉と二人きりで暮らしていました。このごろになって急に姉が、沼津を嫌がりまして、どうしても江戸へ出たいと言いますので、私たちは身の回りのものを一切整理して、ただ今江戸へ上る途中なのです。江戸へ出たところで、何の目当てもございませんし、思えば心細い旅なのです。のんきに菊の花など議論している場合じゃなかったのです。私も菊の花は、嫌でないものですから、つい、余計のおしゃべりをしてしまいました。もう、よしまししょう。どうか、あなたも忘れて下さい。これで、お別れいたします。考えてみると、今の私たちは、菊の花どころではなかったのです。」と寂しそうな口調で言って目礼し、傍らの馬に乘ろうとしたが、才之助は固く少年のそでをとらえて、

「待ちたまえ。そんなことなら、なおさら私の家へ来てもらわなくちゃいかん。くよくよしたもうな。私だって、ひどく貧乏だが、君たちを世話することぐらいはできるつもりです。まあ、いいから私に任せて下さい。姉さんも一緒だとおっしゃったが、どこにいますか。」

見渡すと、先刻は気づかなかったが、瘦せ馬の陰に、ちらと赤い旅装の娘のいるのが、分かった。才之助は、顔をあからめた。

才之助の熱心な申し入れを拒否しかねて、姉と弟は、とうとう彼の向島の陋屋にひとまず世話になることになった。来てみると、才之助の家は、彼の話以上に貧しく荒れ果てて

いるので、姉弟は、互いに顔を見合わせてため息をついた。才之助は、一向平気で、旅装もほどこす何よりも先に、自分の菊畑に案内し、いろいろ自慢して、それから菊畑の中の納屋を姉弟たちの自分の住居として指定してやったのである。彼の寝起きしている母屋は汚くて、それこそ足の踏み場もないほど頹廢たいはいしていて、むしろこの納屋のほうが、ずっと住みよいくらいなのである。

「姉さん、これあいけない。とんだ人のところに世話になっちゃったね。」陶本の弟は、その納屋で旅装を解きながら、姉に小声でささやいた。

「ええ、」姉は微笑して、「でも、のんきでかえっていいわ。庭も広いようだし、これからお前が、せいぜい佳い菊を植えてあげて、御恩報ごんぱうじをしたらいいのよ。」

「おやおや、姉さんは、こんなところに、ずっと永くいるつもりなのですか？」

「そうよ。私は、ここが気に入ったわ。」と言って顔を赤くした。姉は、二十歳くらいで、色が溶けるほど白く、姿もすらりとしていた。

その翌朝、才之助と陶本の弟とは、もう議論を始めていた。姉弟たちが代わる代わる乗って、ここまで連れて来たあの老いた瘦せ馬がいなくなっているのである。昨夜確かに菊畑の隅に、つないでおいたはずなのに、今朝、才之助が起きて、まず菊の様子を見に畑へ出たら、馬はいない。しかも、畑を大いに走り回ったらしく、菊は食い荒らされ、痛めつけられ、さんざんである。才之助は仰天して、納屋の戸をたたいた。弟が、すぐに出てきた。

⑭ 陋屋 狭くてむさくるしい家。

⑮ 納屋 農具などを収蔵する小屋。

⑯ 御恩報じ 御恩返し。

「どうなさいました。何か御用ですか。」

「見て下さい。あなたたちの痩せ馬が、私の畑をめちやめちやにしてみました。私は、死にたいくらいです。」

「なるほど。」少年は、落ち着いていた。「それで？ 馬は、どうしました。」

「馬なんか、どうだっていい。逃げちゃったんでしょ。」

「それは惜しい。」

「何を、おっしゃる。あんな痩せ馬。」

「痩せ馬とは、ひどい。あれは、りこうな馬です。すぐさま探しに行ってください。」
「こんな菊畑なんか、どうでもいい。」

「なんですって？」才之助は、蒼くなって叫んだ。「君は、私の菊畑を侮蔑するのですか？」

姉が、納屋から、かすかに笑いながら出てきた。

「三郎や、謝りなさい。あんな痩せ馬は、惜しくありません。私が、逃がしてやったのです。それよりも、この荒らされた菊畑を、すぐに手入れしておあげなさいよ。御恩報じの、いい機会じゃないの。」

「なあんだ。」三郎は、深いため息をついて、小声でつぶやいた。「そんなつもりだったのかい。」

弟は、洪々、菊畑の手入れに取りかかった。見ていると、葉を食いちぎられ、打ち倒され、もはや枯死しかけている菊も、三郎の手によって植え直されると、さっと生気を回復し、莖はたつぷりと水分を含み、花のつぼみは重く柔らかに、しおれた葉さえ徐々にその静脈に波打たせて伸び腰する。才之助は、ひそかに舌を巻いた。けれども、彼とても菊作りの志士である。プライドがあるのだ。どてらの襟をかき合わせ、努めて冷然と、

「まあ、いいようにしておいて下さい。」と言い放って母屋へ引き上げ、布団かぶって寝てしまったが、すぐに起き上がり、雨戸のすき間から、そっと畑をのぞいてみた。菊は、やはり凜乎⑯と生き返っていた。

その夜、陶本三郎が、笑いながら母屋へやって来て、

「どうも、今朝ほどは失礼いたしました。ところで、どうです。今も姉と話し合ったことでしたが、お見受けしたところ、失礼ながら、あまり楽なお暮らしでもないようですし、私に半分でも畑をお貸し下されば、いい菊を作って差し上げましょうから、それを浅草⑰辺りへ持ち出してお売りになったら、よろしいではありませんか。ひとつ、大いに佳い菊を作って差し上げたいと思います。」

才之助は、今朝は少なからず、菊作りとしての自尊心を傷つけられていることとて、不機嫌であった。

「お断り申す。君も、卑劣な男だねえ。」と、ここぞとばかり口をゆがめて軽蔑した。

⑯ どてら 綿を厚く入れた広袖の着物。

⑰ 凜乎 きりつとした様子。

⑰ 浅草 今の東京都台東区内、浅草寺辺りの地。

「私は、君を、風流な高士^①だとばかり思っていたが、いや、これは案外だ。己の愛する花を売って米塩^②の資を得るなどは、もつてのほかです。菊を凌辱^③するとは、このことです。己の高い趣味を、金銭に換えるなどは、ああ、汚らわしい、お断り申す。」と、まるで、待のような口調で言った。

①高士 人格が高潔でりっぱな人。
②米塩の資 生活の費用。
③凌辱 人を侮って、辱めること。

三郎も、むつとした様子で、語調を変えて、

「天からもらった自分の実力で米塩の資を得ることは、必ずしも富をむさぼる悪業ではないと思います。俗と違って軽蔑するのは、間違いです。お坊ちゃんの言うことです。いい気なものです。人は、むやみに金を欲しがってもいけないが、けれども、やたらに貧乏を誇るのも、いやみなことです。」

「私は、いつ貧乏を誇りました。私には、祖先からの多少の遺産もあるのです。自分一人の生活には、それで充分なのです。これ以上の富は望みません。よけいな、おせっかいは、やめて下さい。」

またもや、議論になってしまった。

「それは、^④狷介^⑤というものです。」

④狷介 心が狭く、人の考えを素直に聞かない様子。

「狷介、結構です。お坊ちゃんでも、かまいません。私は、私の菊と喜怒哀楽を共にして生きていくだけです。」

「それは、分かりました。」三郎は、苦笑してうなずいた。「ところで、どうでしょう。

あの納屋の裏のほうに、^⑥十坪^⑦ばかりの空き地がありますが、あれだけでも、私たちに、しばらく拝借願えないでしょうか。」

「私は物惜しみをする男ではありません。納屋の裏の空き地だけでは不足でしょう。私の菊畑の半分は、まだ何も植えていませんから、その半分もお貸しいたしましょう。ご自由にお使い下さい。なお断っておきますが、私は、菊を作って売ろうなどという下心のある人たちとは、おつき合いたいしかねますから、今日からは、他人と思っただきます。」

「承知いたしました。」三郎は大いに開口の様子である。「おことばに甘えて、それでは畑も半分だけお借りしましょう。なお、あの納屋の裏に、菊のくずの苗が、たくさん捨てられてありますけれど、あれもちょうだいいたします。」

「そんなつまらぬことを、いちいちおっしゃらなくてもよろしい。」

不和のまま、別れた。そのあくる日、才之助は、さつさと畑を二つに分けて、その境界に高い生け垣を作り、お互いに見えないようにしてしまった。両家は、絶交したのである。

やがて、秋たけなわのころ、才之助の畑の菊も、すべてみごとな花を開いたが、どうも、お隣の畑のほうが気になって、ある日、そつとのぞいてみると、驚いた。いままで見たこともないような大きな花が畑一面に、咲きそろっている。納屋も小ぎれいに修理されていて、さも居心地よさそうなしゃれた構えの家になっている。才之助は、心中穏やかでなかつ

⑥十坪 一坪は約三・三平方メートル。

た。菊の花は、明らかに才之助の負けである。しかも瀟洒（せうしやう）な家さえ建てている。きつと菊を売って、大いにお金をもうけたのに違いない。けしからぬ。こらしめてやろうと、義憤（ぎふん）やら嫉妬（しど）やら、さまざまの感情が怪しくごたごた胸を揺すぶり、いたたまらなくなつて、ついに生け垣を乗り越え、お隣の庭に闖入（せうじん）してしまつたのである。花一つ一つを、見れば見るほど、よくできてゐる。花卉の肉も厚く、力強く伸び、精いっぱい開いて、花輪は、ぶりぶり震えているほどで、命限りに咲いているのだ。なお注意して見ると、それは皆、自分が納屋の裏に捨てた、あのくずの苗から咲いた花なのである。

「うむ。」と思わずうなつてしまつた時、

「いらつしやい。お待ちしていました。」と背後から声をかけられ、へどもどして振り向くと、陶本の弟が、にこにこ笑いながら立つてゐる。

「負けました。」才之助は、やけくそに似た大きい声で言つた。「私は潔い男ですからね、負けた時には、はっきり、負けたと申し上げます。どうか、君の弟子にして下さい。これまでの行きがかりは、さらりと、」言つて自分の胸をなで下ろして見せて、「さらりと水に流すことにいたしましたしょう。けれども、——」

「いや、その先は、おっしゃらないで下さい。私は、あなたのような潔癖（けつへつ）の精神は持つていませんので、御推察（ごすいさつ）のとおり、菊を少しづつ売っております。けれども、どうか軽蔑（けいべつ）なさらないで下さい。姉も、いつもそのことを気にかけております。私たちだつて、精いつ

ばいなのです。私たちには、あなたのように、父祖の遺産というものもございませんし、ほんとうに、菊でも売らなければ、のたれ死にするばかりなのです。どうか、お見逃し下さつて、これを機会に、またおつき合いを願います。」と言つて、うなだれている三郎の姿を見ると、才之助も哀れになつてきて、

「いや、いや、そう言われると痛み入ります。私だつて、何も、君たち姉弟を嫌つてゐるわけではないのです。殊に、これからは君を菊の先生として、いろいろ教えてもらおうと思つてゐるのですから、どうか、私こそ、よろしくお願いいたします。」と神妙（しんめう）に言つて一礼した。

いったんは和解成つて、間の生け垣も取り払われ、両家の往来が始まつたのであるが、どうも、時々議論が起こる。

「君の菊の花の作り方には、なんだか秘密があるようだ。」

「そんなことは、ありません。私は、これまで全部あなたにお伝えしたはずです。あとは、指先の神秘です。それは、私にとつても無意識なもので、なんと言つてお伝えしたらいいのか、私にも分かりません。つまり、才能（さいのう）というものなのかもしれません。」

「それじゃ、君は天才で、私は鈍才だというわけだね。いくら教えても、だめだというわけだね。」

「そんなことを、おっしゃつては困ります。あるいは、私の菊作りは、命がけで、これ

②瀟洒 さつぱりして気がきいてゐる様子。

③闖入 ことわりなしに突然入り込むこと。

をみごとに作って売らなければ、御飯をいただくことができないのだという、そんなせつばつまった気持ちで作るから、花も大きくなるのではないかとも思われます。あなたのように、趣味でお作りになる方は、やはり好奇心や、自負心の満足だけなのですから。」

「そうですか。私にも菊を売れと言うのですね。君は、私にそんな卑しいことを勧めて、恥ずかしくないかね。」

「いいえ、そんなことを言っているわけではありません。あなたは、どうして、そうなんでしょう。」

どうも、しっくりいかなかった。陶本の家は、いよいよ富んでいくばかりのようであった。そのあくる年の正月には、才之助に一言の相談もせず、大工を呼んでいきなり大邸宅の建築に取りかかった。その邸宅の一端は、才之助の茅屋の一端に、ほとんど密着するくらいであった。才之助は、再び隣家と絶交しようと思ひ始めた。ある日、三郎がまじめな顔をしてやってきて、

◎茅屋
みすぼらしい家。

「姉さんと結婚して下さい。」と思ひつめたような口調で言った。

才之助は、ほおを赤らめた。初め、ちらと見た時から、あの柔らかな清らかさを忘れかねていたのである。けれども、やはり男の意地で、変な議論を始めてしまった。

「私には結納のお金もないし、妻を迎える資格がありません。君たちは、このごろ、お金持ちになったようだからねえ。」と、かえっていやみを言った。

「いいえ、みんな、あなたのものです。姉は、初めから、そのつもりでいたのです。結納なんてものも要りません。あなたが、このまま、私の家へおいで下されたら、それでいいのです。姉は、あなたを、お慕い申しております。」

才之助は、狼狽ろうばいを押し隠して、

「いや、そんなことは、どうでもいい。私には私の家があります。入り婿は、まっぴらです。私も正直に言いますが、君の姉さんを嫌いではありません。はははは、」と豪傑らしく笑って見せて、「けれども、入り婿は、男子として最も恥ずべきことです。お断りいたします。帰って姉さんに、そう言いなさい。清貧が、嫌でなかったら、いらっしゃい、と。」

けんか別れになってしまった。けれどもその夜、才之助の汚い寢所に、ひらりと風に乗って白い柔らかい蝶ちょうが忍び入った。

「清貧は、嫌じゃないわ。」と言って、くつくつ笑った。娘の名は、黄英きえと叫んだ。

しばらく二人で、茅屋に住んでいたが、黄英は、やがてその茅屋の壁に穴を開け、それに密着している陶本の家の壁にも同様に穴を穿うがち、自由に両家が交通できるようにしてしまった。そうして自分の家から、あれこれと必要な道具を、才之助の家に持ち運んでくるのである。才之助には、それが気になってならなかった。

「困るね。この火鉢だって、この花瓶だって、みんなお前の家のものじゃないか。女房の持ち物を、亭主が使うのは、実に面目ないことなのだ。こんなものは、持ってこないよう

にしてくれ。」と言ってしかりつけても、黄英は笑っているばかりで、やはり、ちよいちよい持ち運んでくる。清廉の士をもつて任じている才之助は、大きい帳面を作り、左の品々一時お預り申し候と書いて、黄英の運んでくる道具をいちいち記入しておくことにした。けれども今は、身の回りの物すべて、黄英の道具である。いちいち記入していくならば、帳面が何冊あつても足りないくらいであつた。才之助は絶望した。

「お前のおかげで、私もとうとう髪結いの亭主みたいになつてしまった。女房のおかげで、家が豊かになるということは男子として最大の不名誉なのだ。私の三十年の清貧も、お前たちのためにめちやめちやにされてしまった。」とある夜、しみじみ愚痴をこぼした。黄英も、さすがに寂しそうな顔になつて、

「私が悪かつたのかもしれない。私は、ただ、あなたのお情けにお報いしたくて、いろいろ心をくだいて今まで取り計らつてきたのですが、あなたが、それほど深く清貧に志しておられるとは存じ寄りませんでした。では、この家の道具も、私の新築の家も、みんなすぐ売り払うようにしましょう。そのお金を、あなたがお好きなように使つてしまつて下さい。」

「ばかなことを言つては、いけない。私もあろうものが、そんな不浄なお金を受け取ると思うか。」

「では、どうしたら、いいのでしょうか。」黄英は、泣き声になつて、「三郎だつて、あなたに御恩報じをしようと思つて、毎日、菊作りに精出して、ほうぼうのお屋敷にせつせと苗をお届けしてはお金をもうけているのです。どうしたら、いいのでしょうか。あなたと私たちとは、まるで考え方が、あべこべなんですよ。」

「別れるよりほかはない。」才之助は、ことばのゆきがかりから、更に更になりつばなことを言わなければならなくなつて、心にもないつらい宣言をしたのである。「清い者は清く、濁れる者は濁つたままで暮らしてゆくよりほかはない。私には、人にかれこれ命令する権利はない。私がこの家を出ていきましよう。あしたから、私はあの庭の隅に小屋を作つて、そこで清貧を楽しみながら寝起きすることにいたします。」ばかなことになつてしまつた。けれども男子は一度言い出したからには、のつびきならず、あくる朝早速庭の隅に一坪ほどの掛け小屋を作つて、そこに引きこもり、寒さに震えながら正座していた。けれども、二晩そこで清貧を楽しんでいたら、どうにも寒くて、たまらなくなつてきた。三晩目には、とうとう我が家の雨戸を軽くたたいたのである。雨戸が細く開いて、黄英の白い笑顔が現れ、

「あなたの潔癖も、あてになりませんわね。」

才之助は、深く恥じた。それからは、ちつとも強情を言わなくなつた。墨堤（おぼくゑい）の桜が咲き始めるころになつて、陶本の家の建築は全く成り、そうして才之助の家と、びつたり密着して、もう両家の区別が分からないようになった。才之助は、今はそんなことには少しも

口出しせず、すべて黄英と三郎に任せ、自分は近所の者と将棋ばかりさしていた。一日、一家三人、墨堤の桜を見に出かけた。ほどよいところに重箱を広げ、才之助は持参の酒を飲み始め、三郎にも勧めた。姉は、三郎に飲んではいけないと目で知らせたが、三郎は平気で杯を受けた。

「姉さん、もう私は酒を飲んでもいいのだよ。家にお金も、たくさんたまったし、私がいなくなっても、もう姉さんたちは一生遊んで暮らせるでしょう。菊を作るのにも、あきちゃった。」と妙なことを言って、やたらに酒を飲むのである。やがて酔いつぶれて、寝転んだ。みるみる三郎のからだは溶けて、煙となり、あとには着物と草履だけが残った。才之助は驚愕して、着物を抱き上げたら、その下の土に、みずみずしい菊の苗が一本生えていた。初めて、陶本姉弟が、人間でないことを知った。けれども、才之助は、今では全く姉弟の才能と愛情に敬服していたのだから、嫌厭の情は起こらなかった。哀しい菊の精の黄英を、いよいよ深く愛したのである。かの三郎の菊の苗は、わが庭に移し植えられ、秋にいたって花を開いたが、その花は薄紅色でかすかにぼっと上気して、かいでみると酒のおいがした。黄英の体については、「亦た他異無し。」と原文に書かれてある。つまり、いつまでも普通の女体のままであったのである。



太宰治 一九〇九（明治四二）年～一九四八（昭和二三）年。小説家。青森県生まれ。一九三六（昭和一一）年発行の第一創作集『晩年』で実験的作品群を発表して作家としての地位を確立し、戦後は「斜陽」によって流行作家となった。作品に「津軽」「桜桃」「人間失格」などがある。本文は『太宰治全集4』（一九九八）によった。